

J-STAGE による記事の配信状況と h 指数の報告

千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 田隈 広紀

1. 当記事の目的

2号と3号の掲載記事にて、当学会が発刊する3つの雑誌（学会誌・予稿集・P2M マガジン）の電子化の経緯とそのメリット、操作方法を解説致しました^{[1][2]}。当記事ではこの現状報告として、各誌の J-STAGE 配信状況を記し、また最近 J-STAGE の画面レイアウトが刷新されたので新画面での簡単な操作説明を付します。さらに J-STAGE へ記事を移行したことに伴い、国際 P2M 学会誌の「h 指数」が 3,000 以上^[3]ある国内のジャーナルの中で 21 位にランクイン^[4]しておりましたので、併せて報告致します。

2. J-STAGE へのデータ移行の進捗状況

これまでの記事で報告した事項の要約は下記の通りです。

- 1) 2015 年年次総会承認の「デジタル化の推進」の一環で、当学会が出版している雑誌の公開方法を、冊子体から電子的な方法へ移行している
- 2) 一方で、以前まで学会誌・予稿集の配信に用いていた CiNii が 2016 年 3 月末に新規記事掲載の受付を停止したことに伴い、配信元を全て J-STAGE へ移行した
- 3) J-STAGE では国内外の著名な電子ジャーナルサイトとのデータ連携、掲載記事の引用・被引用関係の表示、高度な検索機能、各

種統計データ等が提供される

2016 年度から J-STAGE における当学会の雑誌掲載サイトの構築を開始し、学会誌と予稿集については、すでにバックナンバーを含めたすべての記事が閲覧可能になっています。なお当学会の学会誌は過去に 2 回の書誌名変更を行っており、創刊号は「国際 P2M 学会記念論文集」、Vol. 1, No. 1 から Vol. 5, No. 2 までは「国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌」というタイトルで、別々の J-STAGE サイトから配信されております（電子ジャーナルシステムの共通的な制約でタイトルが異なる雑誌の記事を統合して配信できず、各サイトに相互リンクを張る形で対応しました）。これに加え、2018 年末にはこの「P2M マガジン」用の J-STAGE サイトをリリースする予定です。

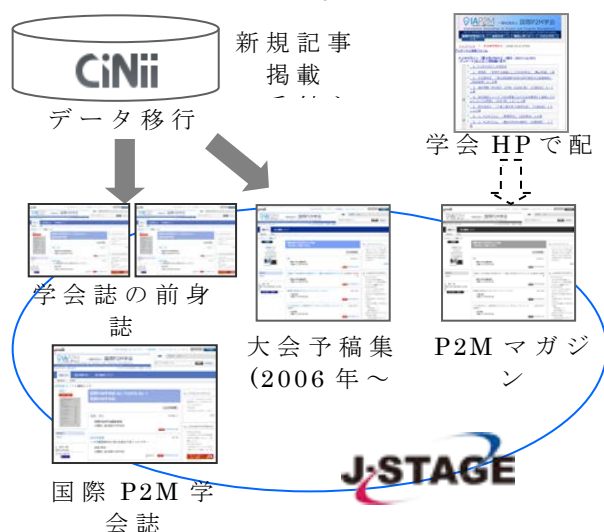


図1 J-STAGE へのデータ移行の状況

すでに公開されている雑誌の

J-STAGE サイトの URL は下記の通りです。もちろん検索サイト経由でもご覧頂けます。

- 国際 P2M 学会誌（有審査論文カレント誌）^[5]

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjour/-char/ja/>

- 国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌（有審査論文前身誌）^[6]

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjourante/-char/ja/>

- 国際 P2M 学会記念論文集（有審査論文前身誌）^[7]

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjoufirstissue/-char/ja/>

- 国際 P2M 学会研究発表大会予稿集^[8]

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmproc/-char/ja/>

3. 最新版の J-STAGE 利用方法

J-STAGE の画面レイアウトが 2017 年 11 月に刷新されましたので、新しい画面の簡単な使い方を説明致します。

各雑誌のトップページは、各種検索サイトで書誌名で探して頂ければ、恐らく最上部でヒットすることと思います。アクセスしますと図 2 のような書誌サイトのトップページが出てきます。

この画面では、注目記事や月間アクセス数ランキング（共にアクセス状況から自動表示）、発行機関の基本情報・投稿方法・規程の閲覧、前身誌へのリンク、J-STAGE 内の全ての記事を対象とした検索機能が提

供されています。実はこの トップ画面 では「このジャーナル内での検索」機能が提供されていません。当該機能を利用する場合、まずメニューから「巻号一覧」をクリックし、その先のページ（図 3）でご利用下さい。

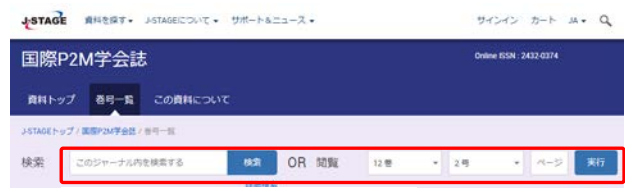
J-STAGE 内の全記事を対象とした検索機能 ↓



各巻号の選択や雑誌内の記事検索 ↓ 注目記事のピックアップ



図 2 J-STAGE 書誌サイトのトップ画面^[5]



↑ 表示する巻号の

図 3 巻号一覧の画面^[5]

巻号一覧の画面では、巻号を指定した記事の表示、書誌内の記事検索機能、各記事の PDF ダウンロード機能等が提供されています。論文・講演資料の PDF は、これまでと同様に公開から 6 か月の間は、会員のみ入手可能です。会員の皆様には、春季研究発表大会の直前にその年度における学会誌・予稿集共通の購読者 ID・パスワードをメールで通知しております（年度途中で新規入会頂いた方は別途事務局へお問合せ下さい）。ダウンロードした PDF は印刷とテキスト選択は可能ですが、改変はできません。

4. 国際 P2M 学会誌の h 指数について

前述の「国際 P2M 学会誌」は、ご存知の通り当学会の査読付き論文を掲載したカレント誌ですが、この雑誌が 国内学術雑誌における h5-index のランキングで 21 位にランクインしました。貴重な論文をご投稿頂いた著者の皆様や、査読部会の先生方をはじめとする、ご関係者各位のご尽力が形として現れた成果と考え、報告させていただきます。

h 指数とは、ジャーナルや研究者の学術的貢献・権威を表す評価指標です。これに類似する指標として有名なものに Impact Factor があり、こちらでは引用文献データベース Web of Science のデータを基に、当該ジャーナルにおける「2・3 年前の論文掲載数」に対する「2・3 年前の論文が 1 年前に引用された数」の平均値を求めることで算出されます。

この Impact Factor は現在学术界で最も定着している評価指標である一方、評価対象が Web of Science に掲載されている雑誌に限定されること、掲載記事の母数を減らすことで値を高めることが可能であること等のデメリットが指摘されています^[9]。一方 h 指数では「公刊した論文のうち被引用数が h 回以上であるものが h 件以上あることを満たすような最大の数値」を求めます^[10]。例えばあるジャーナルに掲載された論文のうち、被引用数が 10 回だったものが 1 件、5 回だったものが 4 件、3 回だったものが 5 件あった場合、「5 回以上引用された論文が 5 件以上ある」ため h 指標は 5 です。もっと卑近な表現をするなら、「たくさん引用される論文をたくさん掲載するほど高くなる評価指標」です。この値の算出に用いるデータの対象期間が 5 年間である指標が h5-index です。算出方法は少し複雑ですが、当該ジャーナルの「論文掲載数（量）」と「被引用数（質）」の双方に基づいて算出される評価指標として近年注目されており、2012 年より「Google Scholar Metrics」にて各国のランキング情報が提供されています。

この「Google Scholar Metrics」が算出した当学会の査読付きジャーナル「国際 P2M 学会誌」における h5-index は 2018 年 4 月時点で「7(中央値：15)」、この値は 国内の査読付きジャーナルの中で 21 位 (!) ^[4]です。ちなみにいわゆる「査読付きジャーナル」は 2013 年時点で 3,304

誌存在します^[3]（ただし分野によって論文引用の傾向が異なる点に留意する必要があります）。

Publication	h5-index	h5-median
1. 土木学会論文誌 B2 (海洋工学)	14	10
2. 電気学会論文誌 B (電力・エネルギー部門誌)	12	15
3. 電子情報通信学会技術研究報告	11	10
4. 情報処理学会論文誌	11	15
5. 日本建築学会構造系論文集	10	12
～ 中略 ～		
20. 理学療法科学	8	8
21. 国際 P2M 学会誌	7	15

図4 Google Scholar Metricsにおける国内学術誌の h-5index の Top100 ランキング^[4]

Google Scholar Metrics のランキング表示画面（図4）では、各ジャーナルの h5-index の値と、その算出根拠となった論文の被引用数の中央値が確認できます。さらに各ジャーナルのリンクを選択すると、h5-index の算出根拠となった論文の被引用数が参照できます（図5）。現状、国際 P2M 学会誌は「被引用数が8回以上の記事が7件」あり、h5-index は7となっています（ちなみにもし被引用数が8回以上の記事があと1件あれば h5-index は8となり国内10位でした）。この事実をアグレッシブに言い換えれば、「他の論文から7回以上引用された優れた論文が、過去5年間に7件も掲載されているジャーナル」であることを示しています。

Title / Author	Cited by	Year
企業 R&D におけるプラットフォームマネジメントの実践 和田義明, 亀山秀道, 中村昌祐 国際 P2M 学会誌 6 (2), 99-111	30	2012
企業における研究開発プロセス手法の考案 和田義明, 亀山秀道 国際 P2M 学会誌 7 (2), 75-85	19	2013
イノベーションプログラムのマネジメントに関する考察 山本秀男 国際 P2M 学会誌 8 (2), 123-133	12	2014
P2M 視点による次世代ビジネスモデル: 先端的変革を促進する総合社員のクロスインテグレーション効果 小原善博 国際 P2M 学会誌 7 (2), 1-20	15	2013
地域活性化のコミュニティマネジメントとしての価値協業プラットフォーム戦略 荒井祐介, 木嶋悠一, 出口弘 国際 P2M 学会誌 7 (1), 1-13	14	2012
P2M プラットフォームマネジメントによる地域活性化の事例分析 中山政行, 亀山秀道 国際 P2M 学会誌 8 (2), 71-82	12	2014
P2M 理論による IT サービス産業の水平連携プラットフォームの構築 佐藤達男, 亀山秀道 国際 P2M 学会誌 6 (2), 113-126	8	2012

図5 国際 P2M 学会誌の h5-index 算出根拠
（図4の画面から国際 P2M 学会誌のリンクを選択し表示）

5. 終わりに

学術誌における評価指標はいずれもデメリットを有しますし、この指数のみでジャーナル・研究者の価値を判断する危険性は、皆様もご存知のことと思います。また現状では、当学会誌を含む国内 Top100 のジャーナルにおける論文の被引用は、殆ど同誌内の論文からでした（各誌ともオリジナルな専門領域を対象にするためむしろ必然的）。

ただグローバル化が進行し、専門領域の垣根が低くなりつつある昨今、このような共通的・客観的な指標が無視できないことも自明の理でしょう。会員の一人として「できる限り早く・良い論文を投稿し続ける」ことが、数年後 Win-Win の波及効果を起こすことを、この記事を書いていて明確に感じました。またマネジメント系トップジャーナルである「Journal of Management」と「Management Science」の h5-index は共に 82 で、Strategic Management

に分類される全世界のジャーナルでトップタイでしたが、これらの h 指数に用いられた論文の被引用は、ほとんど他誌からのものでした^[11]。

学会誌の J-STAGE 移行によって、皆様の貴重なご知見・ご経験に基づくオリジナルな主張を、既往研究の効率的な調査でさらに洗練させ、全世界へ配信する基盤が整いました。さらにこれまでの皆様のご尽力によって「h5-index 国内 21 位」という確かな手応えが得られました。これらで築かれた当学会の学会誌・研究発表大会というプラットフォームの上で、会員の皆様の学術的・社会的活動をさらに加速し、長期的には全世界から注目・引用される論文が多数配信されるまで共に成長していく、というシナリオが描けないでしょうか？私も編集委員の一員、そして論文著者の一人として、この構想（妄想？）を実現するべく微力を尽くして参りたいと思います。

参考文献

- [1] 田隈広紀「国際 P2M 学会誌の電子化について」、P2M マガジン No.2、pp. 2-3、2016
- [2] 田隈広紀「J-STAGE の移行状況の報告と利用方法の解説」、P2M マガジン No. 3、pp. 2-3、2017
- [3] 時実象一「日本発行の科学技術分野の電子ジャーナル数 2005 年、2008 年、2013 年の比較」、情報管理 Vol. 56, No. 12、pp. 822-832、2014
- [4] Google Scholar Metrics, Top publications (Language を「Japanese」で絞り込み)

https://scholar.google.com/citations?view_op=top_venues&hl=en&vq=ja

- [5] 国際 P2M 学会「国際 P2M 学会誌 J-STAGE サイト」
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjour/-char/ja>
- [6] 国際 P2M 学会「国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌 J-STAGE サイト」
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjourante/-char/ja>
- [7] 国際 P2M 学会「国際 P2M 学会記念論文集 J-STAGE サイト」
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjourfirstissue/-char/ja>
- [8] 国際 P2M 学会「国際 P2M 学会研究発表大会予稿集 J-STAGE サイト」
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmproc/-char/ja>
- [9] Wikipedia「インパクトファクター」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/インパクトファクター>
- [10] Wikipedia「h 指数」
https://ja.wikipedia.org/wiki/h_指数
- [11] Google Scholar Metrics, Top publications (Subcategories を「Strategic Management」で絞り込み)
https://scholar.google.com/citations?view_op=top_venues&hl=en&vq=bus_strategicmanagement

*各 URL のコンテンツは 2018 年 4 月 30 日現在存在し、本記事はその時点の情報に基づき記載。

平成 30 年 5 月 1 日受理